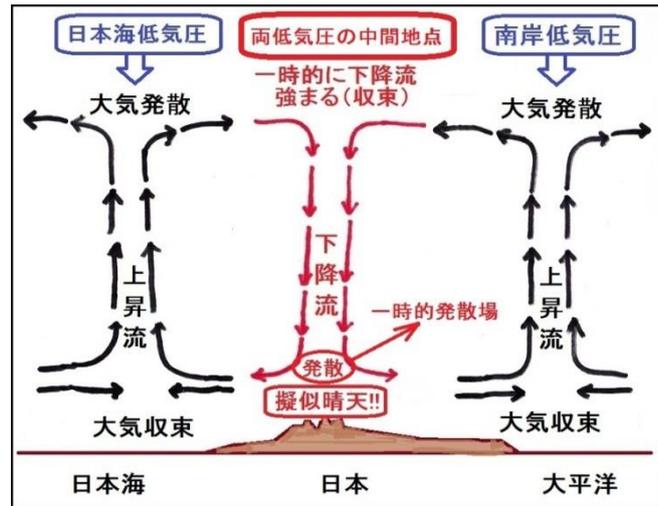


【7】冬季の擬似晴天

立山・折立から薬師岳に登る登山口の暗い林の中に苔むした遭難碑がひっそりと建っています。もう半世紀近くも前のことですから記憶に無い方も多いかと思いますが、これは愛知大学山岳部パーティーが正月の薬師岳で暴風雪のためにコースを間違えて遭難、パーティー13人全員が死亡した事故で、当時は大きな山岳遭難事故として話題になりました。

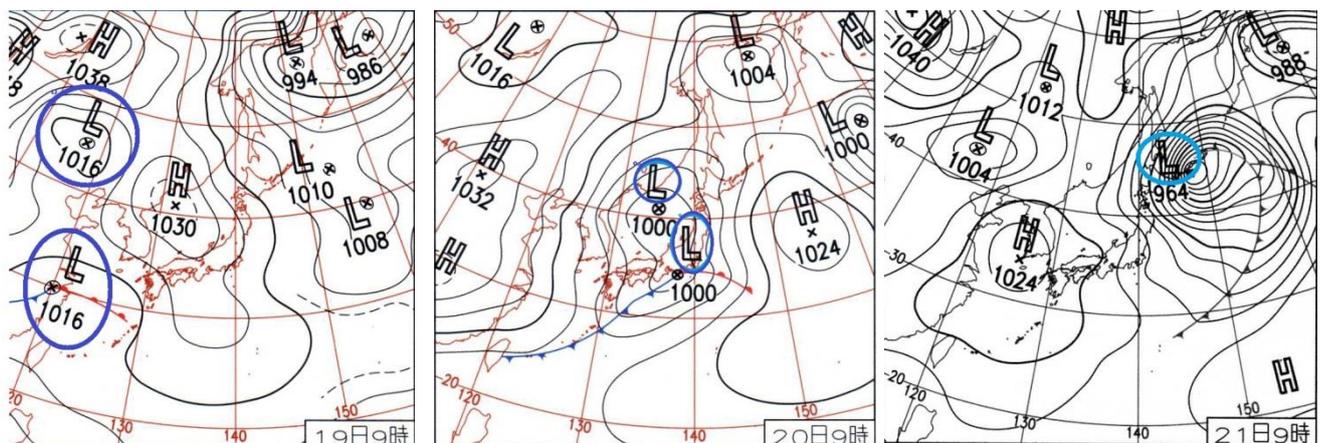
冬季の北アルプスはいつも悪天で滅多に好天が訪れないのが普通ですが、この時の気象を当時の記録で紐解いてみると、彼等は12月27日に入山、30日まではまづまづの天候でしたが、その後大晦日から風雪となり、1月2日朝になって風雪は幾分緩み天気回復の兆しが見えたので薬師岳に向って出発、ところが短時間のうちに再び天候が悪化しました。2日の北アルプスの天候は全般的に大荒れの状態であったようです。

この東の間の天気回復の兆しを「擬似晴天」と呼び、持続時間はせいぜい僅か1～2時間程度と言われています。これは、例えば該当する山域が二つ玉低気圧の中間部に位置していて、二つ玉が通過する瞬間に極く短時間風雪が弱まる現象が起きることがあります。この現象は、その場所の上層の下降流が一時的に強くなって地上では気流が発散状態となるからです（これを「発散場」といい、発散場では大概好天になります）。



二つ玉が通過した後は益々低気圧が発達して風雪が強くなります。（下図の例でも20日の二つ玉は猛烈に発達して21日には北海道南岸に達し中心気圧が36hPaも急降下して爆弾低気圧になりました。このため青森では暴風雪のため100棟以上の家屋が倒壊、5万世帯が停電）。擬似晴天はこの他にも、西高東低の冬型気圧配置が緩み、ポーラーロー（別稿参照）が出来る場合にも起こることがあります。

さて、当時の天気図と同じような天気図を探すと、下図のようになります。これは2009年2月19日～21日の天気図ですが、薬師岳の遭難もこれと同様な天気図の時に発生しました。



（気象庁HP「日々の天気図」から引用）

薬師岳の遭難はこの天気図で置き換えると20日の朝発生したのですが、1000hPaの低気圧が二つ、東海地方と日本海中部にあり二つ玉低気圧の配置となっています。薬師岳はこの二つ玉の丁度真ん中に位置しています。前日19日の天気図を見ると、朝鮮半島の東に高気圧があるものの1016hPaの低気圧が満州と上海にあり、これらがそれぞれ日本海と本州南岸に東進する形になっていて、この時点で翌日の北アルプスは（だけでなく日本全域が）二つ玉による大荒れとなることを予測しなければなりません。

最近では携帯電話でも天気図が見えるようになったので、携帯が繋がる場所では天気図をチェックするか、或いは面倒でもNHKラジオの気象通報を聞いて気圧配置をチェックすることが重要です。

(本項 完)

[「天気図から読み解く山岳気象遭難の防止」目次に戻る](#)

[「山岳気象と遭難」目次に戻る](#)